

戦後の二条魚町界限

札幌医科大学医師会

浦澤 正三

戦時中の規制が全て解かれ、混沌としていたが奇妙に明るい時代だった。‘東京キッド’の歌「♪右のポケットにゃ夢がある、左のポケットにゃチュウインガムー♪」の気分。戦後昭和20年暮から23年にかけての頃である。

この頃、わが家は創成川を渡った東1丁目、南2条通り南側に連なる海産物小売店街‘二条魚町’の一隅に移り住んだ。同じ2条通りの北側には、西角から果物屋、食堂、乾物問屋、薬局、焼き鳥（うなぎ屋）などの商店がずらり並んでいた。また、これらの商店への買い物客を目当てに、両側の商店群と道路中央の車道の間は、勝手に瀬戸物や日用品を広げ、野菜・果物をリヤカーに積み、屋台で食べ物を売る露天商人たちで立て込んでいた。

わが家は鮮魚店に挟まれた西角から2軒目で、表通りで漬物、佃煮などの小売販売を行い、店先から入り天井が高くコンクリート床の細長い作業場を抜けた突き当たり、家族と奉公人約10人が住む2階建住居があった。

戦後あらゆる物資が欠乏する中、横流しされた米軍物資、旧日本軍の放出物資、隠匿物資などが市場に出回り、狸小路一体は次第に活気が戻ってきて、週末の西1丁目の闇市は足の踏み場もない大賑わいを見せた。徐々に海産物が入荷するようになった二条魚町でも、週末の夕方は、連なる店々と居並ぶ露天商の間を行き交う買い物客に、鮮魚商のだみ声、さび声が飛び交う。この活気には子供心も高揚し、土曜日に学校から帰ると母親に命じられて店先に立ったこともあった。

通りの向い側、西角の果物屋には、当時珍しいブンブンなる横型電気冷凍庫が1台店頭で置かれていて、よくアイスキャンデーを買って食べたものである。その隣には暖簾を下げた間口が狭く奥まで細長い食堂があったが、この店の印象は強烈だった。通りに向けた拡声器で、当時人気の少女歌手・美空ひばりの‘悲しき口笛’を、朝から晩8時過ぎ迄がんがん流し続けるのである。「♪丘のホテルの赤い灯も胸のあかりも消えるころ---♪」。以前から流行歌は好きで初めは聞き流していたが、終いには拒否反応で頭が痛くなり、以来、美空ひばりの全ての歌、殆どの演歌が嫌いになった。

乾物屋、薬屋はさて置いて、焼き鳥屋の匂い、特に稀に入荷した‘うなぎ’をその店先の露台でキュッといわせてさばいた後に、風に乗り50mも離れた路上まで流れ出す蒲焼の匂いには、腹の虫も悶絶。春先、屋台に寒雀の焼き鳥と称するものが出た折、われ先にと求める客に混じり匂いに抗し難く私も1、

2本買って見たが、全くの期待はずれ。肉はこれっぽっちもなくタレのついた骨をしゃぶるのみだった。

ある週末の午後、父は自分の店と向い合った露店と露店の隙間に棒で1.2m程の四角を描いて言った。「漬物に使った後の大根の葉を捨てるのは勿体ない。小遣いにしていからここで売ってみなさい」。言われた通りに大根1、2本分の葉を束ね、10束位を莫蔭に並べて20銭位で売った。偶に買う人がいて程なく売り切れたが、捨てる物もお金になること、掛け声とそのタイミングが大切と知った。父と拓銀南二条支店に赴き、自分名義の口座を作り、以後、学校帰りに時々寄っては入金し、正月の小遣いを含め最後は21円余り貯まったと記憶する。

狸小路の闇市については以前に書いたことがあるが、狸小路から魚町にかけての創成川周辺にも思い出がある。豊平川とつながる創成川は、当時生活排水が流れ込み時にゴミも捨てられるドブ川だったが、魚町付近では川の両岸は所々芝生が生えている程度で柵もなく、大雨の後など増水して危険だから近寄ると言われていた。ところが、この川に架かる南二条橋辺りから、夜遅く大きな水音が聞こえることがあった。酔っ払った進駐軍兵士と喧嘩になった日本人が、大柄な米兵に両手両足を掴まれて1、2の3「ドボン」と投げ込まれるのを見たことがある。時には酔った日本人同士の喧嘩によることもあった。

川風の涼しい夏の夕方涼みに出ると、風の間に間に流れてくる「港が見える丘」のけだるい歌声に時代の気配を感じ、川向こう南1条に近い遠くの店先から夕闇を裂いて響き渡る裂帛の「鞭声粛々夜河を渡る」など詩吟の朗詠に心揺さぶられることもあった。露店の出店も規制され何も無い川岸だったが、時に南二条橋の袂で川を背に、小銭を入れる茶碗を前に、幼女を伴い三味線を弾く身なりの貧しい老婆に出くわすことがあった。津軽三味線の野生的な音色は子供心にも新鮮で、荒れ狂う吹雪を思わせる「じよんがら節」の撥捌きには圧倒された。

初夏になると川岸にやって来る大道香具師の巧みな口上に人の輪ができる。平たい小さな缶入りの塗り薬が、擦り傷、切り傷、はては疔の虫にも効くという。代表はガマの油売りで、足元の袋に入っている（という）奄美大島で捕獲の猛毒ハブに腕を咬ませ薬を塗って治すというので、学校帰りにまだかまだかと最後まで粘るが、青大将や日本刀の刀傷（これもかなり怪しい）で誤魔化されるのが落ちだった。

敗戦直後の日本経済はひどいインフレで、昭和21年初頭には旧紙幣の流通停止・預金封鎖と新円切替によるデノミネーションが実施された。旧円の流通最終日の夕方、札幌駅前通りを旧10円札の札束を満載して疾走する小型トラックの荷台から、風に煽られた札片が紙ふぶきのように宙に舞い歩道にも飛び散ったが通行人は見向きもしなかったと、当時の新聞が報じていた。デノミの実施は不完全で、市民が戦前に持っていた現金資金の大半は紙くずと化した。通帳の20数円のことなど誰にも言ったことはないが、この時以来、私の国の金融政策や銀行への不信は消えない。